

市民研会員から寄せられた

2024 年 私のおすすめ 3 作品

締め切り 2024 年 2 月 17 日、到着順に掲載

市民科学研究室は毎年年末になると、会員の皆さんから「私のおすすめ 3 作品」という原稿を募集しています。その年に読んだ本（雑誌や漫画も含む）や観た映画や TV 番組、聴いた CD や足を運んだ展覧会やライブなどで、多くの人に勧めたい 3 作品を挙げていただき、それらにコメントを付けてもらう、という企画です。2007 年から始めて、毎年『市民研通信』の原稿とさせていただいています。

●杉野 実

1◆書物学 22・禅寺の学問』（勉誠出版）

アーザル・ナフィーシー『テヘランでロリータを読む』（河出文庫）

市民研の理事としての仕事もようやく軌道にのってきて、普段考えることも市民研での活動と関係したことが多くなりました。私は「図書館プロジェクト」には直接にはあまり関与していませんが、そちらの「思想」からはそれなりに影響を受けていて、「歴史的記録の意義」みたいなことも最近よく考えます。

『書物学』という雑誌ははじめて読みましたが、京都の禅寺がお経や書画ばかりか対馬を通じた朝鮮外交に関する記録まで相当数所蔵していることをのべた特集のほか、近世浄瑠璃本や近代地図帳の流通を論じた記事などもとても興味深く、地道に研究している人々の努力に思いをはせました。歴史記録は勿論「現在の政治」にも強く影響されます。英米文学を自由に「読む」ことさえできないイラン神権政治の現状は憂慮すべきですが、その批判者のなかにも「自由」を無条件には肯定しない共産主義者が相当数まじっているという状況もまた、よくよく慎重に読み解いていかなければならないものだと思います。

2◆木下 齊『まちづくり幻想』（SB 新書）

『法学セミナー825・戦争犯罪に立ち向かう』（日本評論社）

「コンサルタント」木下さんの本は近所の店頭でたまたまみかけたものですが、買って読もうとまで思った背景には市民研「福島廃校活用プロジェクト」からの連想があります。「営利事業として成り立つこと」に基本的な意義をみとめる本書の議論が市民研に直接役立つとは思えませんが、ただ最近はどうも「経済性」概念が空回りしているというか、安易に「外部のコンサルをよんで外部の一流企業をよびこ

めばいい」という論調が目立つ、もっと地元が主体性をもたなければだめだ、という議論から学べるものはあります。『法学セミナー』は無論特集にひかれて買ったのですが、それ以外の記事も脳死とか性加害とか地方自治とかホットな話題をあつかったものばかりで勉強になりました。市民研との関連で気になったのは、「地下水源を守るために町が条例で採石業者の活動を制限した」事案の判例解説でしょうか。調布陥没で問題視された「大深度地下法」についても判事や学者がこれくらい綿密に議論すればいいのに、と私は思ったのです。

3◆「ユニークペア定理」の完全に初等的な証明に成功（杉野オリジナルです！）

さて最後は市民研とも、私の本来の専門である非営利団体研究ともまったく関係のない、純粋な「趣味」の領域である数学についての話です。「辺の長さがすべて整数である直角三角形と二等辺三角形の組のうち、周の長さや面積がいずれも等しい組は、（相似をのぞけば）『(377, 352, 135)と(366, 366, 132)』の1組しかない」という「ユニークペア定理」については、2020年ごろの「おすすめ3作品」でも言及しました。この定理そのものは私のオリジナルでもなんでもなく、たしか2018年か2019年に慶応大学の院生が発見して証明しています。ただ学生さんたちののは、「超橢円曲線」の「有理点」を数える「数論幾何学の高度な技法」を用いたもので、むしろ「こんなに身近な応用例があった」と話題になっていました。でも今回は「変数を適当に分割すれば」、「周や面積が『等しい』場合にかぎり」高校生でも理解できる程度の代数だけで厳密に証明できることを示せました。あとは発表法が問題ですが、いいお考えはありませんか？

●吉岡 寛二

どんな事柄に対しても、立場・視座・視点・経験・知識などの違いによって理解と判断は異なってきます。昔からそう思っているので、自分の詳細意見はあまり述べずに作品名を紹介などの最小限の情報にとどめてきました。しかし今年は例年に比べて、個人的意見もかなり述べようと思います。

今年のテーマは、①ウクライナ（書籍とYouTube）、②戦前・戦中の書籍（復刻版）の三つです、③メディアの変化と選挙の変化（YouTube）の三つです。③は関連する事柄が広すぎ・多すぎて、何をおススメしようかとかなり迷いました。

1◆「中学生から知りたいウクライナのこと」（藤原辰史、小山哲共著、2022/6/10、ミシマ社）

この本は、おすすめ3作品の一つにしようと早くから決めていたのですが、トランプ氏が米国大統領になったので停戦になる可能性もかなりあり、市民研のホームページに掲載される頃には興味が沸かない話題になっているかもしれません。ウクライナ戦争が勃発した当初から、多くの研究者・コメンテーターがテレビに登場して、ロシアとウクライナに関する情報は巷にあふれました。私の場合、最初の頃からYouTubeでテレビ局の報道番組から情報を得ることが中心でしたが。これらはすべて「現在の日本からみたロシア／ウクライナ」でした。

立場・視点の違いによって自分が知らなかったことを知ることができます。藤原辰史氏の本の紹介は今回で三冊目になりますが、共著者の小山氏はポーランド文化を研究されている専門家です。ポーランドはロシアとウクライナ以外の国であり、かつ歴史的に非常に影響が大きい国なので、「ポーランドからみたロシア／ウクライナ」という独自の視点には興味深いものがあります。税込み 1760 円です。

ロシア／ウクライナ戦争に関して、独特の感性を持たれている「異色の物書き」の意見も面白い。「東大 TV」というプログラムがあって、このプログラムの中の一つです。

https://tv.he.u-tokyo.ac.jp/lecture_5953/

2022/5/6 に行われた講義で、演者は「東京大学先端科学技術研究センター准教授」の小泉悠氏です。前半の約一時間は講義、後半の約一時間は質疑応答になっています。

無料ですので興味がある方は暇なときにご視聴ください。

2◆「東亜全局の動揺—我が国是と日支露の関係・満蒙の現状」(松岡洋右、1931/9/25 出版本の復刻版、2019/4/20、経営科学出版)

GHQ が日本占領時に、当時に出回っていた書籍を「焚書処分」したことをご存知でしょうか。この行為は当時の国際法上は違法らしいのですが、すでに販売されている本が販売禁止になりました。その数は 7700 点以上に及ぶらしいのですが（ネット上には 7000 点以上、7700 点、7769 点などの情報があります）、2010 年代後半からそれらの復刻版が出版されるようになりました。

高校の歴史では、松岡洋右は全権外務大臣のとき国際連盟を脱退して、大東亜戦争を推進した一人として習いましたが、本当のところはどうだったのでしょうか。この本の校正後記には、「9/15 に書き終えて最終校正中に 9/18 の新聞に柳条湖事件が起こったことを知って愕然とした」と書かれています。松岡洋右も東京裁判にかけられた一人ですが、本人が当時どのように考えていたのかを知りたいと思って読んでみました。目次だけをあげますと、第一章 序論、第二章 対露外交、第三章 対支外交、第四章 満蒙問題、第五章 結語 になっています。彼も、当時の天才の一人だったのかも知れません。（石原莞爾に並ぶ稀有な人材だったと思っています。）

3◆【兵庫県知事選挙の感想】ネット vs テレビのメディア対決を中田はどう分析したか？（ユーチューブ、中田敦彦）

昨年は東京都知事選・自民党総裁選・衆議院選挙・兵庫県知事選と続きましたが、私自身が世間から得ている情報の 8～9 割がユーチューブです。特に、兵庫県知事選の結果からは、いわゆるオールドメディアが時代の変化に取り残されていることを痛感しています。それで「メディアの変化」に関する解説動画を取り上げたいと思っていました。

兵庫県知事選においては NHK 党の立花孝志氏が有名になりましたが、東京都知事選以降の選挙戦で大きな役割を果たした方が二人います。一人は ReHacQ の高橋弘樹氏であり、もう一人はユーチューブ大学の中田敦彦氏です。

メディアの変化とそれに伴う選挙戦の変化について解説しているのが中田敦彦氏です。

<https://www.youtube.com/watch?v=VIM06NiSjBI> 【兵庫県知事選挙の感想】

ネット vs テレビのメディア対決を中田はどう分析したか？

参考に、兵庫県知事選投票日の前々日と前日に公開された解説もあります。

<https://www.youtube.com/watch?v=hDJhoQVIFTY> 兵庫県知事選という究極のミステリー①

<https://www.youtube.com/watch?v=jYDcDP-2URw> 兵庫県知事選という究極のミステリー②

中田氏以上に、選挙戦の様相を変えたのは高橋氏です。

<https://www.youtube.com/watch?v=OikI2IgsnLc> 東京都知事選候補者討論会

<https://www.youtube.com/watch?v=b-bNBgMhpNM> 兵庫知事選候補者討論会

●谷 俊一郎

1◆デイヴィッド・リヴィングストン 梶 雅範・山田俊弘（訳）（2014）「科学の地理学」法政大学出版局、298 ページ、3,800 円+税、ISBN:978-4-588-37120-2

代表の上田氏から紹介を受けた訳者の本で、欧州における科学史や哲学史とその地理的な考察は素晴らしい。

「イギリス科学」、「フランス科学」、「ロシア科学」といった地理的な切り口で科学史を語る本は、他にはないと思う。

科学は地理的、および場所の特殊性には縛られないと思われてきたが、どうやらそうではないことと思えるし、将来科学の地形図を造る科学史家が現れるかも知れない。

また、第5章後半の「知識の哲学的な描像は、（中略）ある行動を行わなければならないし、ある現場に行かなければならず、ある対象を目にしなければならず、ある人びとと話をしなければならない。」と言う記述で、水俣病における原田正純氏、宇井純氏、西村肇氏の素晴らしい功績をあらためて思い出した。

科学と地理というあらたな切り口に加え、哲学や社会学、医学も含めた科学通史として相当読み応えのある本である。。

2◆石井昌國 佐々木稔（2023）「普及版 古代刀と鉄の科学」雄山閣、251 ページ、3,960 円+税、ISBN:978-4-639-02928-1

題名にある「科学」という言葉に興味を示してこの本を買うと、科学に精通している方々は失意を感じる可能性も少なからずあるかも知れない。「科学」の切り口で日本刀について書いている本を探しているのであれば、「日本刀の機能美と科学的合理性」（サイエンス・アイ新書）や「人はどのように鉄を作ってきたか」（講談社）がお勧めである。

話は戻して、この本の凄いところは、考古学的、刀剣学的な綿密な調査結果を惜しげもなく披露しており、古代（5世紀～）刀の成分分析を緻密に行っており、岩鉄/砂鉄の出土分布などの記述もあり、日本刀の成り立ちを理解するには非常に参考になる。

東京を含め、埼玉、千葉、神奈川、群馬、栃木などの関東近県にも5世紀、6世紀からの古墳が多数

存在し、そこから出土した剣や刀も多くあることに驚いた。蕨手刀に関する記載も諸説ある中、ある程度網羅された記述になっている。

日本刀の歴史を知るためには、最も優れた書籍であると思う。

3◆玉蔵 (2024) 「地底科学」ヒカルランド、251 ページ、2,000 円+税、ISBN:978-4-86742-422-3

題名にある「科学」という言葉に興味を示してこの本を買うと、かなりの失意に叩きのめされる可能性が大きい。

内容として、前半は所謂「陰謀論」として片付けられることの多い欧州貴族やユダヤ資本が資本主義の現世を支配しているというお話で、後半は共鳴や波の話である。著者は、元金融系プログラマーで 2011.03.11 後は、ハケ岳の麓（長野県諏訪郡原村）に移住し、ある種のコミュニティを形成し、無農薬、無肥料農業を実践している。

とても繊細で神経質な性格で、お酒も強く、歌もうまい。後半では、著者の玉蔵の友達である「地底人」から教わったことを書いている。

「地球科学」という言葉も登場するが、音に関する波の説明が秀逸過ぎて、さすが一世を風靡したミュージシャンであると頷ける。前半と後半の内容の高低差については、玉蔵氏の仲間や知人によってはそれほど違和感を感じないものでもある。

●林 浩二

2024 年は約 100 の館・展示を訪問しました。その中から 3 つを取り上げます。

1◆第 21 回企画テーマ展「森のちゃれんが宝箱 ースタッフ一押しの収蔵資料や博物館活動を紹介する展覧会、いや、展乱会!?ー」 北海道博物館（札幌市）2024 年 2 月 10 日（土）～4 月 7 日（日）

<https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/post/past-exhibition/detail22650/>

「森のちゃれんが」とは、茶色のレンガが特徴の北海道博物館のこと。その宝箱ということで、館長を含め学芸系の研究職員全員がそれぞれ一つずつコーナーを担当して「一押し」の資料などや活動を紹介する、学芸員を前面に出すオムニバスな展示。多様な分野の専門家がこの博物館の活動が作られてきた、作られていることを伝えるユニークな展示として楽しめた。聞くところによると、大型資料を運ぶための館内の大型エレベーターが保守・点検作業のために使えない期間があることを逆手にとって、人力で運べる大きさ・重さのものだけで展示を構成することになったとのこと。

Covid-19 の流行で 2020 年に世界中の博物館が臨時休館した際に、オンラインでの情報提供を「おうちミュージアム」と呼ぶことを提唱し、全国で 250 館以上の博物館が参加した。そのおうちミュージアムのコーナーもあり、いくつかの活動が体験できるようになっていた。

*参考サイト

・北海道博物館 おうちミュージアム <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/ouchi-museum/>

2◆みんぱく創設 50 周年記念企画展「水俣病を伝える」

国立民族学博物館（大阪府吹田市） 2024 年 3 月 14 日（木）～6 月 18 日（火）

https://www.minpaku.ac.jp/ai/lec_event/47870

現地の一般社団法人水俣病センター相思社を中心に、民博の研究員が長期間にわたってフィールドワーク（参与観察）した成果を企画展示として構成したもの。「フィールドワーク展示」と自ら記している。以下の参考サイトも参照していただきたい。

博物館が中立（であるべき）かどうかは、昨今よく話題になる。この展示では、研究者の立場が明確にできているし、「水俣病を伝える」活動をしている複数の方々のインタビュー動画も同様である。

パネル等と画像・動画が中心なので、コンテンツをオンライン版展示として公開してはと考える。

*参考サイト：

・美術手帖 レポート（2024.4.5）「水俣病を伝える」（国立民族学博物館）会場レポート。過去はいかに「伝える」ことができるのか <https://bijutsutecho.com/magazine/news/report/28752>

・美術手帖 Curator's Voice 第 21 回（2024.4.26）

プロジェクト・リーダーの平井京之介が語る企画展「水俣病を伝える」（国立民族学博物館）。「伝える」を伝えるフィールドワーク展示はいかに出来上がったのか <https://bijutsutecho.com/magazine/series/s34/28846>

・一般財団法人水俣病センター相思社 <https://www.soshisha.org/>

3◆みんぱく創設 50 周年記念特別展「吟遊詩人の世界」

国立民族学博物館（大阪府吹田市）2024 年 9 月 19 日（木）～12 月 10 日（火）

https://www.minpaku.ac.jp/ai/lec_event/51494

アジアとアフリカを中心とした「吟遊詩人」についてとりあげたとてもユニークな展示。音声入りの動画も多数あった。

特に秀逸だったのは、モンゴルの地方の食堂の女主人が調査員の 1 人の若手研究者に即興の「角付け」を歌う動画。モンゴルではこのような歌を歌う風習が受け継がれているらしく、最近になってヒップホップ／ラップが入ってくるや否や、モンゴルでは大ヒットし、注目される歌手も多数出ているとのこと。

現代の世界中の音楽シーンでヒップホップ／ラップは中心にあるとみられているが、その各地・各民族でのルーツに吟遊詩人的活動があるかもしれないことはもっと注目されてよいと思う。

●瀬川 嘉之

1◆2023 年公開の映画『福田村事件』

1923 年。日本の市民、臣民はすでに戦争と虐殺をしている。そして戒厳。市民研通信の山口直樹さんによる連載「日中学術交流の現場から」第 19 回「市民科学と臣民科学 西光万吉の科学観を中心に(1)」

以降とも関係していそうだ。

2◆同じく 2023 年公開の韓国映画『ソウルの春』

2024 年、韓国は戒厳令の年。映画の題材になった 1979 年から 1980 年を思えば、何が起きるか、どうひっくり返るか予断を許さない。日本は 2011 年 3 月以降、緊急事態宣言が続く。

3◆澤瀉久敬『哲学と科学』1967 年 [改版] 2024 年

「しかし、そのように対象に服従することによって、科学は対象を自分の支配下におきます。ところが、哲学は支配しないが服従もしません。ただ、存在と合一するだけです」

澤瀉が 1941 年から「医学概論」を講義した大阪大学医学部が太陽の塔の裏のキャンパスへ移転したのが亡くなる 2 年前の 1993 年。2024 年、日本保健物理学会が大阪大学であり、モノレールから黒い太陽を見た。

●上村 光弘

◆遠藤周作『深い河』講談社文庫、講談社、1996 年

これは遠藤周作の最晩年の小説のひとつです(発表は 1993 年)。もともとキリスト者であった遠藤が、どうしてインドの仏教に興味をもったのか不思議だったので、読んでみました。実は私も学生時代にインドに行ったことがあります。本の中に出てきたガンジス河などを見て回って、40 日ぐらい旅行しました。だから懐かしく読ませてもらいました。

遠藤は自分の考えが異端といわれて悩んでいたみたいでした。おそらく大津という登場人物が遠藤の内面みたいな感じだったと思います。大津はガンジス河に死体を運ぶ手伝いをしています。信仰とは何なのか考えさせられます。

この作品はオムニバスでこれまでの遠藤作品の集大成みたいなところがあって、過去の作品の一部が引用されていたり、過去の作品の登場人物も登場することもあって、非常に興味深く読みました。

ただ、なぜキリスト者がインドの仏教に魅かれたのか、結局はわかりませんでした。ほかの遠藤作品も読んでみたいと思いました。

●角田 季美枝

1◆室橋裕和 (2024)『カレー移民の謎：日本を制覇する「インネパ」』集英社新書、集英社、1,200 円 + 税、新書判 334 ページ、ISBN : 978-4-08-721308-9

おすすめ 3 作品の 2021 年で、同じ著者の『ルポ新大久保』を紹介した。その後、『北関東の異界 エスニック街道国道 354 号線：絶品メシとリアル日本』(新潮社、)という、国道 354 号線(群馬県高崎

市から茨城県銚田市）沿いで食べることができるエスニックは、ブラジル、タイ、インドネシアなど多彩な「理由」を紹介した著作も読んでいる（この本もおすすめてある）。

室橋さんと取材対象の距離は非常に絶妙で、筆運びもリズムカル。実は、この『カレー移民の謎』、入手して読んだのが、室橋さん登壇のイベントの2日前（出版されていることを知らなかったのだ）。読みやすいのだが、分量が新書とはいえ本文 320 ページ（1 ページ 1 行 42 字×15 行）、内容もかなり多岐にわたる。目次を紹介すると、以下である。

はじめに 「ナン、おかわりどうですか？」

第1章 ネパール人はなぜ日本でカレー屋を開くのか

第2章 「インネパ」の原型をつくったインド人たち

第3章 インドカレー店が急増したワケ

第4章 日本を制覇するカレー移民

第5章 稼げる店のヒミツ

第6章 カレービジネスのダークサイド

第7章 搾取されるネパール人コック

第8章 カレー屋の妻と子供たち

第9章 カレー移民の里、バグルンを旅する

おわりに カレー移民はどこへ行くのか

それでも一気に読みがで（食事も忘れて読むほどおもしろかった）、室橋さんのお話の前までには読み終え、お話を聞きながらいまお話されているのは、この本のあそこか～、そういうことだったのか～と理解が進んだ。

タイトルにある「インネパ」は目次から想像できる人もいると思うが、インドとネパールの最初の音をつないだ日本語だ。ネパール人が経営する「インドカレー＋ナン＋サラダ」のセットが出てくるインドカレー店を指している。日本に 4000～5000 軒あるそうだ。

なぜインネパがこれだけ増えたのか、なぜネパール人経営の店でインドカレー？ 不思議に思った方、ぜひ、本書を手にとってください。明治以降の日本でのインドカレー定着の歴史のみならず、ネパール人経営者がなぜ日本でインドカレー店をするのか、そこで働く人はどういう人か、なぜネパールではなく日本で働いているのか、日本でどういう生活をしているのか、など、どんどん「謎」の扉が著者の筆とともに開かれていき、世界の構造が見えてくる。

個人的に気になるのは、第 8 章で紹介されるネパール人コックの子どもたちの状況だ。ネパールに帰れないが、日本の学校でも学ぶことができない（杉並にあるネパール人専用のインターナショナル校は学費が高額でそこに行くことができる子どもは限られている）。基礎教育保障をだれがどのようにするのか。「多文化共生」日本にするのは誰なのか、ということを非常に考えさせられる。

2◆伊沢正名（2017）『葉っぱのぐそをはじめよう：「糞土思想」が地球を救う』山と溪谷社、本体 1,120 円＋税、A5 判変型 208 ページ、ISBN：978-4-635-50039-5

関野吉晴初監督のドキュメンタリー映画『うんこと死体の復権』（公式サイト URL：<https://www.unkotoshitai.com/>）には 3 人登場する。そのひとりが本書の著者の伊沢正名さんだ。どこかで見た名前と思って映画を見ていたら、伊沢さんが撮影したキノコの映像が紹介されていた。「あっ、昔見たキノコ図鑑の写真だ！」

現在、伊沢さんは糞土師と名乗り、野糞こそ地球を救うということを実践、講演などしている。映画では伊沢さんの人生をたどり、糞土師の実践を紹介し、共鳴した方と一緒に野糞を自身の家の裏山の森でし、その野糞がどうなっていくのか掘り返す……

このドキュメンタリー映画を見損なった人は、以下に「遺書」がわりに公開されている [Youtube の動画「うんこはごちそう」](#) (50 分強) をぜひ見てほしい。

映画を見たあとに、伊沢さんの野糞関連本をあれこれ読んでみた。その中でのおすすめが本書である。穴を掘って野糞をしたあとのおしりふき、穴の蓋にする葉っぱは何がいいのかという実践的な解説かつ図鑑（この部分はカラー）である。伊沢さん自身の体験をふまえて「葉の質」「尻触り」「拭取力」「評価」のレーティング結果も紹介されている。ただ、皮膚の状況は人や年齢によっても異なるので、カスタマイズは自身で試すのが好ましいのはいうまでもない。

解説には様々な疑問の回答もあるので、犯罪者にならずに野糞の実践もできる指南書にもなっている。糞土師を名乗るだけにウンチクもいっぱい！

3◆最首悟 (2024) 『能力で人を分けなくなる日：いのちと価値のあいだ』創元社、本体 1,400 円＋税、四六判変型 160 ページ、ISBN：978-4-422-36016-4

10 代以上のすべての読者を対象としたシリーズ「あいだで考える」の 1 冊。「本を読むことは、自分と世界との「あいだに立って」考えてみることなのではないでしょうか。……「書き手たちは皆、物事の『あいだ』に身を置いて考えることのできる実践者。その生きた言葉は「あいだ」を考えるための多様な視点を与えます。」(シリーズ「あいだで考える」創刊のことば)

最首悟さんの名前を最初に知ったのは、『水俣の啓示 (上 (下) 不知火海総合調査報告』(色川大吉編、筑摩書房、1983 年) である。故・石牟礼道子さんが設立や調査に尽力した不知火海総合学術調査団の報告である。最首さんもこの調査団のひとりで、のちに団長もつとめた。

最首さんは長期にわたり適切な言葉を模索する人である。代表的なキーワードが「二者性」で、本書でも紹介されている。第 4 子の星子さんが重度障がい者で星子さんとの日々について考えるなかでうまれた言葉である。正直、この二者性、過去の著作をひもといてもよく理解できないでいた。本書は、この二者性について、3 人の 10 代との対話で語っているので、非常にわかりやすい（少し理解ができるような気がした）。

本書は主題としては、星子さんのこと、やまゆり園事件、日本語、水俣病である。編集部の司会によって、最首さんが経験や思考、思想を語って、それに対する質問がある。それに応答する。最後にひとことずつ感想を語る。対話の時間が限られているので、深堀できていないところもあるのだが、10 代との対話は日本語として心に届きやすい。もっとも二者性について深めているのは、日本語が主題のパートである。

全体としては「いのち」の価値に関する対話である。「いのちの価値」を 50 年ほど考え続けている最首さんの到達点は、「わかろうとする努力は、『結局は、わからない』とあきらめるのではなく、〈いのち〉を生きていく希望なのです。」(はじめに) そして、最首さんは本書の最後でこう書いている。「〈わからない〉がでんと行く手に待ちかまえている状態で、あれこれ考えていると、思いがけない言葉がやってくるのです。」(おわりに)

ちなみに、「いのちを生きていく希望」をグーグル先生に尋ねてみた。最近、検索結果より前に「AI の概要」が出てくる。その内容（「心の支えとなる人とつながり、問題解決に取り組むことで得ることができます」2025 年 2 月 16 日閲覧）は、個人の人生の処方箋的内容のように感じられる。それは他者をわかろうとする努力につながるだろうか？

検索で速攻的な回答を見るだけでは、思いがけない言葉に出会えない。時間をかければ見えてくるとは限らないが、時間をかけて考えることに価値をおかないと見えてこないものがある。本書を読む・読み直すなかで、私にも今までの記憶が思いがけずひょっこり出てきた。それはいまの私だからこそその「収穫」であり、まだその記憶が私のなかでゆらめいている。それをだれかに届けることになるのはさらに時間がかかりそうではあるが。

●白井基夫（編集屋・校正屋）

1 ◆田中俊明＝著『古代の日本と加耶』（「日本史リブレット」No.70）山川出版社、2009 年

この何年か、奈良県にある古墳や神社仏閣に足を運ぶようになった。東大寺や春日神社（奈良市中心部）は、奈良県全体からみると北部にちょっとくっついた程度の狭い地域であり、私が訪れた大和・飛鳥のあたり（桜井市・明日香村など）でさえ、地図上では奈良県の中央より北部に位置している。奈良県は相当に奥が深い。宗教面では、修験道・神仏融合の色が濃い。当然ながら、それらの歴史は京都より古く、古代史の本にも接近した。

そのなかで、驚く発見があった。私が高校時代の日本史で覚えた「任那＝日本支配の任那」は、すでに過去の歴史認識として葬り去られていた。

加耶は 3～6 世紀ごろ、朝鮮半島南部にあった小国群の総称であり、加羅、伽倻などの表記もあると知った。文化庁の Web ページ（HOME>文化財のトピラ 105）に「6 世紀には百済、新羅に圧迫され、532 年に金官加耶が新羅に降伏、562 年には大加耶も新羅軍に敗れ、加耶は滅亡」とあり、「加耶の繁栄は、豊富な鉄のおかげ」と記述されている。製鉄技術は渡来人が日本列島にもたらしたものであり、それによって、列島の文化は大きく飛躍した。鉄鉱石の採取から鉄の加工なしでは、農耕や土木用の道具類はもちろん、馬具をつくることもできなかった。

そう、馬それ自体や飼育技術・乗馬技術も、朝鮮半島や中国から伝わった。漢字や仏教も、政治制度、都市づくり、武器、暦なども。大和朝廷で渡来人が重用された理由はなるほど、うなずけるのだ。空海などが大陸に渡ってすぐ、現地の人とコミュニケーションがとれ、情報収集できた背景も理解できた（「閉鎖的な列島」に対するイメージは大きな間違い）。列島内でも言語を習得できる環境があり、大陸に関する知見はかなりあったといえる。

私はそこからさらに、渡来人に関する本を数冊、読むことになった。教科書に渡来人の活躍は、実際ほど詳しくは載っていないだろう。そのあたりの説明を巧妙に避けた、一般向けの奈良県の歴史案内書にも出くわした。815 年に編纂された『新撰姓氏録』には 1182 氏が記載され、そのうち渡来系氏族は 3 割弱の 326 氏を占めるとか。

去年 10 月、埼玉県日高市の高麗（こま）神社に行った。これが 4 回目の訪問。ちょうど祭りをやっ

ていて、韓国の人たちの踊りを見ることができた。高麗神社の Web サイトには「高句麗からの渡来人 高麗王若光を主祭神として祀る社」との説明がある。朝鮮半島に起源をもつといわれる皇室関係者が多く訪れた場所でもある。なお、高句麗と新羅などの半島における対立は、列島内でのその人たちの処遇にも影を落としていたようである。

2◆トルストイ=著／乗松亨平=訳『コサック 1852 年のコーカサス物語』光文社古典新訳文庫、2012 年

出版社の Web ページの宣伝文句。「これがあのトルストイ！？ コーカサスの大地で美貌のコサック娘とモスクワの青年貴族の恋が展開する。大自然、恋愛、暴力……。トルストイ青春期の生き生きとした描写が、みずみずしい新訳で甦る！」。もう、内容に関する説明は必要ないだろう。

そもそもは去年 9 月 16 日、奈良旅行に向かう新幹線で、レールモントフの『現代の英雄』（光文社古典新訳文庫）を読みはじめてからだった。ふとしたことがきっかけで「これはおもしろそうだ」と思った 1 冊。もともとロシア音楽（クラシック）はそれなりに聴いてきたし、チャイコフスキーやムソルグスキー、ショスタコーヴィチなどのオペラ映像も 20 作品以上、鑑賞していた。ただ、ロシア文学については、かつてドストエフスキーやトルストイ、チェーホフなどの何作品かを讀んだにすぎず、知らなかったも同然。

それから約 2 か月半かけて、40 冊くらいのロシア生まれの小説を讀んだ。11 月には新潮社版『ドストエフスキー全集』（1978～80 年、全 28 巻揃い）を買い込み、彼の全小説を讀もうと決めた。今年 2 月 16 日現在で、小説だけを集めた 16 巻分はほぼ読み終え、あとは『作家の日記』に含まれる数本の短篇を残すだけである。

振り返るとロシアの文学作品では、モスクワやペテルブルクという平らな土地だけではなく、コーカサスや、罪人が送られたシベリアも重要な素材になっていることに気づく。ここではその代表作として『コサック』を見出しにした。ほかに、プーシキン『コーカサスの虜』、トルストイ『ハジ・ムラート』、プラトーフ『ジャン』、プリスターフキン『コーカサスの金色の雲』など、コーカサスを舞台にした作品はたくさんある。

コーカサスとは、現在の国名でいえば、ジョージア、アゼルバイジャン、アルメニア。山岳地帯があり、多民族。ロシアとアラブの中間に位置し、キリスト教とイスラム教の交差点になっている。ドラマが DVD で販売されている、ショーロホフ原作の『静かなドン』という長編があり、ここではコサックの風習や生活の様子が詳しくわかる。ロシアでコサックはロシアを脅かす存在であり、同時にロシアによって、他民族・他国からの攻撃の壁としてうまく利用された。大きな刀を振りかざして馬に乗って大地を駆り、いのちを惜しまず闘う獰猛な人々というコサックに対するイメージが、いくつかの小説には出てくる。コサックはのちに、北海道の屯田兵のモデルになった。

雑誌『TRANSIT』62 号（2023 年 2 月）は、「コーカサスが呼んでいる！」という特集。魅力的な写真が満載。「ワイン発祥ともいわれる食文化や秘境に佇む修道院、伝統的な暮らしを営む山岳の民、オイルマネーで成長する街まで」（出版社・講談社の宣伝文句）紹介されている。

チェーホフには、医師としての視点が織り込まれた『シベリヤへの旅』『サハリン島』という作品もある。どんな人が住んでいるか、どんな夫婦関係（入籍しているか否か）の人がどれだけいるか、どんな

病気をもつ人がどれだけいるかなど、データにこだわった現地の風土や生活の様子が詳細に描かれている。ルポルタージュの先駆け。シベリア鉄道が通っていない時代、その気候・風土の厳しさや整備されていない悪路で、シベリアへの旅は困難を極めた。囚人が4000kmを歩かされたという話は、いくらでもある。

余談。昨年末、おかしいた会社の同僚と忘年会をやったとき、一人の先輩が反知性主義のユーチューバーに変貌していたことがわかり、ひどく残念に思った。私は彼にひと言、「まあ、とにかく、ドストエフスキーでも読みなさい」と、穏やかに厳しく諭したのだった。

3◆的場昭弘『資本主義がわかる「20世紀」世界史講義』日本実業出版社、2023年

まず、目次を出しておく。

ロシア革命が第一次大戦終結を急がせた—ヴェルサイユ条約の罪
 第一次世界大戦後の経済—金びかのアメリカと賠償にあえぐドイツ
 アメリカの大恐慌—戦争が終わったクライシス・1920年代の栄光とその影
 ソ連の発展—現実主義と理想主義の相克
 ナショナリズムと国家の形成—大衆の向かう先
 ファシズムの胎動—国家は道具か主体か
 日本の独足—不戦条約と満州事変
 科学の名のもとに—ユダヤ人虐殺と原子爆弾
 社会主義の拡大と変質—国社会主義の限界
 二重性のアメリカ—1945～1960年
 植民地の独立—政治の解放、経済の隷従
 戦後のヨーロッパと日本—冷戦下の選択
 ベトナム戦争と1960年代—民衆の、民衆による戦い
 アメリカの時代の陰り—変動相場制と日本経済の伸長
 新自由主義と社会主義世界の崩壊—アフガニスタン侵攻とレーガノミクス

的場は歴史や哲学・思想に精通しているだけでなく、ヨーロッパのたくさんのまちを歩き、風景からもそれらについて考えてきた。そして、的場のマルクス理論の解釈にはスキがないように思える。一貫性があり、しかも、現実で起こっている事象の理解に役立つ。明快でわかりやすい。

20世紀でまず注目すべきは、マルクス主義的共産主義運動やアナルコ・サンジカリズム運動が盛んだった1920年代ではないか。米国は20世紀はじめに繁栄を謳歌したが、大恐慌に襲われる。1910年代にはロシア革命があった。ファシズム前夜、第二次世界大戦への入口といえる時代。文化面でも、多様な花が咲いた。米国では「ジャズ・エイジ」、ロシアでは「銀の時代」といわれる。

本書は3冊シリーズの1冊で、『19世紀』と『21世紀』の2冊が、同じ出版社から出ている。的場はこれらでも、マルクスから学んだ理論で一貫して、歴史を視ている。世界史が好きな高校生もラクラク読めるレベル。的場には、外交官だった佐藤優との対談本もあるが、饒舌で理論派のはずの佐藤が完全に押されている。佐藤は的場にまったくかなわない。この本を読んでの的場を知るのもいいだろう。ついでに言えば、19世紀以降の世界についての的場の考え方を知らるための第1のキーワードは「国民国家」

の概念だと思う。

番外編◆一般社団法人落語協会『落語協会百年記念誌』2024 年

非売品。2024 年 2 月、落語協会が設立 100 年を迎えた。「100 周年」と表現しないのは、その歴史が戦争で途切れた時期があり、組織のかたちが一定でなかったという理由がある。私はあるつながりで、落語協会百年実行委員会の記念誌制作チームに呼ばれた。「シロウトばかりで実務的に進まない。協力してほしい」との依頼が舞い込んだのだった。落語・寄席ファンとして、このうえない喜びを感じた瞬間だった。

チームメンバーは、落語家・色物（落語家以外の、漫才・ものまね・音曲などをやる芸人の総称）など。数十人との芸人さんたちと 7 か月にわたり、ページ構成を考えたり、年表をつくったり、校正をしたりした。外部のライターなどはいっさい使わず、すべて協会の芸人さんたちが書き、取材もして作りあげた、渾身の 1 冊。10 月からは、林家正蔵師匠が仕切る全体の実行委員会やほかのチーム会議にも呼ばれ、しばしば発言を求められる機会があった。上座には、柳家喬太郎、橘家圓太郎、林家彦いちといった師匠方が座っており、隅っこにいと「こちらへどうぞ」と促されたものだった。

本誌は 64 ページ、オールカラー。協会会長（当時）だった柳亭市馬師匠の挨拶からはじまり、各界やほかの協会からの祝辞、落語協会の大御所インタビュー、年表（協会関係と時事・風俗）、会員紹介、おかの写真の紹介、コラムなどで構成されている。印刷・製本・ページレイアウトなどは歌舞伎座御用達の印刷会社が担当し、表紙まわりは、動物のものまね芸で人気の五代目江戸家猫八先生が担当した。猫八先生はプロ並みにデザインに詳しく、色はもちろん、箔押しなどの指定も行なった。

最初に出席した集まりで正蔵師匠から「カラーページは、どのあたりに入れればいいでしょうか」という質問がきたときのワクワク感を、きのうのこのように思い出す。そのとき、こちらからいくつか質問したうえで「100 ページはコンテンツ量が多すぎて、つくるのが大変だと思う。64 ページオールカラーがよいのではないかと答えた。当初、記念誌制作チームのリーダーだった夢月亭清麿師匠が 2023 年 12 月、その会議中に倒れるという不幸な出来事もあった（師匠は現在、リハビリ中と聞く。ご回復を祈るのみ）。

なお、昨年 2 月 25 日、100 年前の落語協会が発足地、上野精養軒において、100 年式典が開催された。マスコミは記者会見だけしか参加できず、式典には一人もいなかったが、私は「ぜひ」と呼ばれ、出席させていただいた。また、本誌は、昨年 9 月に湯島天神で開催された年 1 回のオープンな協会のイベント「謝楽祭」において、抽選で当たった何十人かにも差し上げている。

●鈴木 綾

1◆本「病と障害と、傍らにあった本。」里山社

著者：齋藤陽道／頭木弘樹／岩崎航／三角みづ紀／田代一倫／和島香太郎／坂口恭平／
鈴木大介／與那覇潤／森まゆみ／丸山正樹／川口有美子

出版社の紹介には「病や障害の名前ではひとくくりにはできない、その実情。それゆえにその只中にいる人は、心

身のつらさのみならず、誰とも分かち合えない想いに孤独に陥りがちになる。そんな時、外の世界と自分の内とを繋ぐ『窓』となる本は、あったのか。12 人の当事者、介護者による、本と病と障害と、生きることに関わる書き下ろしエッセイ集。」と書かれている。私の大好きな作家、丸山正樹氏も書いているので手に取ったが、どの人のエッセイも胸に沁みた。病気にも障害にも全く縁のない人はある年齢を超したらいないのではないかしら。自分の身に起きることとしてだけでなく、家族や大切な人の病気や障害は理不尽にも突然降ってきたりする。その時にどん底の中で苦しんでいる主人公や理不尽な運命に翻弄されている主人公の本が文字どおり支えになることがある。もちろん本の一字も読めない状況というのもあって、そういう時にはただただ日々を生き延びることに耐えるしかないのだけど、そういう日々を重ねていくうちに、その状況を耐えること自体が習慣になっていったら、生身の人ではない、本の中に自分の分身や支えになる人を見つけたりする。元気なときには何がおもしろいかわからないと思っていた本が我が事のように味わえたりする。私はいまだに『変身』（カフカ）は何がおもしろいかわからないのだけど、苦しい時この作品が好きになったと書いている方がこの本の著者の中に複数いて、そうか～、だからずっと残ってきたんだなあ、と思ったりした。丸山正樹氏が紹介していた上原隆氏のノンフィクションは私にはあまりピンとこなかったけど、丸山氏の書いていることはとても納得。自分だけではないと思えること自体が励ましになる。生きることが楽しいと思えないときに、そんな生き方もあると見せてもらえることが力にもなる。そうだからこそ、誰でも本を読むことが生き延びて行く力になると実感できるくらいには読書の習慣を持てるといい。お家に一冊の本もない子が、学校や公共図書館やその子の落ち着ける「居場所」で、心底楽しめる本と出会って、本の中の「ここではないどこか」に行って力をもらえることを知ってくれたら…。大人が子どもに本を手渡すことの意味はそこなんだと思う。

2◆本「塞王の楯」今村翔吾 集英社

第166回直木賞受賞作。著者、今村翔吾氏は1984年生まれ。この生年に、わ～、若い～と感じるくらい、私は年取ったんだなあ…。この人の「直木賞受賞挨拶」がWEBで読める。

「未だに『今村先生』と呼ぶ人より、『翔吾くん』と呼ぶ人のほうが多い。七年前の二月十四日、滋賀県草津市のとあるホールにいた。ダンス講師だった私が、職を辞して小説家を目指すということで、六つの教室の教え子、保護者たち合同で、送り出す会を開いてくれたのだ。そこで私は『夢は叶うということを残りの人生で証明する。それを最後に教えることとしたい』と、宣言した。拍手で見送ってくれたが、保護者たちは流石に愛想笑いだっただろう。これは十分理解出来るし、無理もないことである。ただ子どもたちは、真っすぐな眼で応援してくれた。のちに聞いても『翔吾くんならやると思っている』と、平然とした調子で言う。胸がちくりと痛んだ。自分自身が信じ切れていなかった。つまり嘘を吐いたことになる。この嘘を実にする。それが私の執筆の原動力の一つであったことは間違いない。きっと私は今も『翔吾くん』のままなのだろう。

そんな私だからこそ、奔走の途中、応援してくれる多くの編集者、そして読者の皆様に出逢うことも出来たと思う。心より感謝を申し上げたい。」（本の話 2022.07.11 コラム・エッセイ）

翔吾くん、生徒に愛されていたなあ。スゴい人気のダンス講師だったんだね！この作品のテンポ感とか、若い登場人物達の存在感、その熱い想いが伝わってくる文章、そうかあ！と納得。

この作品について著者が語る。

「日本には自然石を組み上げて堅牢な要塞を築き上げる〈穴太衆〉という職能集団が、かつて近江に存在した。築城の縄張り（設計図）というのは、有事の際には秘事中の秘事。だから彼らの技術は一切

紙には残さず、すべてが口伝で、起源も定かではありませんが、戦争が起こった時、彼らも武将らと一緒に城に籠ったという記述が残っています。いったい何のために石工たちが城に入ったのか……理由として考えられるのは、穴太衆たちが戦闘によって壊れた石垣を逐次修復するため。さらに敵の攻め方に応じて城内で何らかの作事を行うことによって、より優位に籠城戦を進めることができたのではないかと、大胆な仮説を立ててみた。

作中では幼い頃に落城で家族を喪い、『絶対に破られない石垣』を造ろうと奮闘する主人公の飛田匡介に対し、『どんな城でも落とす砲』を作ろうとする鉄砲職人の国友彦九郎の二人が宿命のライバルとして、関ヶ原の直前、西軍の大軍に囲まれた大津城で激突する。結果的に京極高次を城主とする大津城は、立花宗茂を擁する西軍の猛攻にあって降伏しますが、その直後、関ヶ原では東軍が勝ちます。本当の勝者は誰であったのか——さまざまな因縁が錯綜した戦国時代の最終決着という意味でも、本作にちりばめた企みを楽しんでほしいです」(本の話 2022.01.17 インタビュー・対談)

穴太衆、興味深い。国宝の彦根城は大津城の跡から移築されたということで、石垣がすごくきれい。この作中での大津城は戦いをやめさせようと、難攻不落の城を作ったとの設定、納得。一方の誰もかなわない武器を持てばそこで戦いは終るという考え方。今も「最強の武器が最大の守り」という「説」は根強い。そのあたり、「翔吾くん」は「…決して答えの無いこと。それに挑むのが作家という生き物だと思う。」(集英社 HP) と。

読みながらハラハラドキドキし、納得の終章へ。今村翔吾氏、気になる作家となりました。

3◆舞台 こまつ座『太鼓たたいて笛ふいて』

10年ぶりの再演だと。その10年前にも観たはずなのに、初めて観たみたいな強烈な印象…。

2015年の安保法制変更を過ぎ、コロナ禍を経て、世界が「右傾化」している実感の中で、これは響く。

「戦争は儲かる」「ワクワクする」という物語に乗かって「太鼓たたいて笛吹いた」林芙美子。戦争末期、疲弊した国民を鼓舞するのを期待されて戦地へ派遣されるが、戦いの実相を目の当たりにし、儲かるどころではないと気づき、帰国後、勇ましい文章を書くことをやめる。養子を迎え、長野へ疎開し、新しい命を育てることを贖罪とするような日々。(『百年の子』古内一絵(小学館)の中にも林芙美子をモデルにした作家が学年誌の連載物語もやめてしまったくだりがある) 今となっては1日も早くうまく戦争を終らせられないかと発言し、特高のマークがつくことに…。国中の各地に空襲が続き、戦争は負けて終わった。戦後、死んでしまった人に、寡婦となった人に、親を亡くした子に、家庭を失った人にすまなかった、一緒に生き抜こうと語りかけ、もう「戦争は儲かる」物語には乗らないと書き続け、亡くなった林芙美子…その人そのものかと思える大竹しのぶが大迫力でした。

前回観たときに、全く意識しなかったのが自分でもあきれれるけど、「島崎こま子」(藤村の姪:『新生』の)が重要な役回りが出てきて、その境遇のどこまでリアルかわからないけど、ボロボロでも矜持を失わない「こま子」、不器用だけどステキだった。そして女に対してロクデナシの藤村を井上ひさしはどう考えていたのかも考えてしまった。(井上ひさし自身が最初の奥さんにはひどい暴君だったとのエピソードが多々ある…)

劇の終盤で、娘に先立たれた後の林芙美子の母が言う。あの子が「しっかりしなくちゃ」って何度も言っていたんだと。そして「今度はわたしがしっかりしなくちゃね」と。全くです…戦後80年がやってくる…。

●谷 敦 @市民研 5 年生

1 ◆『NUNO の布づくり 須藤玲子／水戸芸術館』



テキスタイルデザイナー須藤玲子の個展。人間生活にとってエッセンシャルな衣食住の中で、私は食と住に比べると衣に関してはどちらかと言えば興味の薄い生活をしてきた。

人類が地球上の隅々までこれだけ広がり、適応し、増殖し得たのには様々な要因があったはずだが、衣の発展もその要因の一つだったはずである。

その衣は布から作られ、布は糸から織られ、糸はいろいろな素材を縫って作られる。更にそれらが、温度変化や化学変化、或いは織り方により変質し、表情や形態、質感も変えていく。

そして、混紡による利便性の向上と、それと相反するリサイクルの困難さ。

様々なことが複雑に絡み合った難しいパズルのようで、もともと衣に興味の薄い私の目で見ても如何ほど理解し得たかはなはだ疑問であるが、普段は気にも掛けていなかった、NUNO 布という、あまりに身近に有り、日頃は感謝もろくに出来なかった素材たちのことを、目に見える形で見せ、深く考えさせてくれる展示会だった。

2 ◆『小金井から気候危機と向き合う 映画上映会とトークイベント ゼロエミ小金井』

温暖化に抗する催しは少なくはないし、それぞれの講義や勉強会にもいろいろと知見を広めるという点で一定の価値はあると思うのだが、それが一般市民の間に、差し迫った深刻な問題としてどれだけ浸透しているかはいささか心もとないと言わざるを得ない。

この集いでは映画『グレタ 一人ぼっちの挑戦』上映の後にトークイベントが催されたが、その発言者たちの顔ぶれが出色だった。



登壇したのは小金井市内の、農民・日本各地の名産物販店店主・住宅の建設会社社員・学生と司会者（ゼロエミ小金井代表）の 5 名。その各人がそれぞれの立場で感じる気候危機の実態を語り合うもので、一般的に理論、理屈が先行し、気候危機が科学的知識として伝播されがちなのに対して、このトークイベントでは、ことの一つ一つが、具体的に私たちの目に見える危機として話し合われ（例えば、「土中温度が高すぎて、野菜が発芽しなくなった」とか、「ある地方の名産品とされていた魚の種類が変わってしまった」とか、或いは、「断熱工事の重要性を説明したいのに高い工事を売りつけようとしていると勘繰られた」等々）、机上の理論や科学的知識ではなく、差し迫った危機をリアルに実感する場を提供する貴重な場であった。

若いメンバーだけで構成できる顔ぶれではなく、恐らく彼らを下支えする地域に根を張った中年の黒子たちが動いての事と思われたが、この地域で活動する若者たちのエネルギーとそれを温かく見守り育

んでゆく大人たちとの新たな連帯が垣間見られたようで嬉しくなった。

3◆『渡辺えり版 結城座による星の王子様／小金井宮地楽器ホール』

小金井で自慢できるものとして、世界的なアニメスタジオ「スタジオジブリ」は有名だが、もうひとつ藝能の分野で忘れてならないのが、糸操り人形一座結城座。創業寛永 12 年、385 年の伝統を受け継ぎ、海外でも公演を続ける一座です。



結城座の舞台には、人形だけでなく生身の俳優も登場し、時には人形を操る者も顔を出して演じたりもする。勿論、人間と人形ではサイズが全く違うのだが、それは、虚と実、空想と現実、過去と現在そして未来、地と空など、現実世界で我々を分け隔てる物事を軽々と飛び越え我々を異空間へと引き込む。

真に伝統を受け継ぐ者は常に革新的であると言われるが、渡辺えりの脚本によりサン・テグジュペリの原作はより不思議さを増し、飛翔感を持ち、時空を自由に行き来する一方で、市内の小学生が人形遣いとして登場したり、スマホ・AI・原爆・ウクライナ侵攻といった言葉が台詞にちりばめられ、現実感、現代性をも併せ持ち、作者たちの反戦・平和への願いが織り込まれ、それらすべてが400年近い伝統に裏打ちされた確かな技術により舞台に現出し昇華する。見事な舞台に魅せられた。

●桑垣 豊

1◆『ドラマ 団地のふたり』全8回 NHK・BSドラマ 2024年9月1日～11月3日放送

《架空インタビュー「橋爪功さんに聞く」》

★具体的なことを調べたわけではなく、橋爪さんのことを勝手に想像して書いているので、本気にしないように。ただし、番組の内容はそのとおりです。

橋爪

この番組への出演の依頼があったとき、小泉今日子さんが娘役で共演できるということで、一にも二にも引き受けることにしました。全8回の放送で、はじめはそれほど視聴率が高くなかったんだけど、NHKが「あさイチ」でとりあげたこともあって、注目を集めることになりました。再放送で見た人が多いんじゃないかな。

聞き手

小泉今日子さんが「あさイチ」のプレミアムトークに出たのは、番組中盤あたりです。

橋爪

大したことは何もおきない東京近郊の団地の話です。想定は、50年以上前に建った公団（住宅都市整備公団：今のUR）団地。現実の団地を使って撮影しているので、みなさんが見かけたような風景が出てきます。

ふたりというのは、小泉今日子さんと小林聡美さん演じる野枝と奈津子で、これが幼なじみ。いったん2人は団地を離れたことがあったけど、また、戻ってきて、しょっちゅう会っている。

この3作品を書いているKさんは、状況が少し似ているから、この3作品にとりあげたんじゃないかな。

聞き手

といいますと。

橋爪

野枝は大学の非常勤講師で、実家の両親と同居している。「授業は午後からだから、11時にいたら間に合う」なんていう非常勤講師にありがちな会話が出てくる。「日本の近現代文学を原作とした・名作映画たち」というネットの連載もしている。

Kさんも、非常勤講師でネットの連載もしている。最近まで、実家の両親と毎日会っていた。知り合いに黒メガネをかけたときの野枝とよく似た感じの知り合いがいて、年齢も同じらしい。ドラマの役柄では、常勤講師をめざしているので、55歳という若めの想定だけど。

私は元気な80歳の父として。一番多いせりふは「便所に行く」。

聞き手

あっ、なるほど。この3作品の原稿とそのネットの連載の期限が同じ日なので大変だ、と言っていました。

橋爪

ちなみに奈津子のほうは、無名のイラストレーター。このイラストが、またいい。昔からの団地に対する愛情のしみ出たドラマだね。



2◆『魏志倭人伝の考古学』佐原真 岩波現代文庫学術106 2003年

佐原さんが亡くなる少し前に書いた文章をまとめた本です。内容は読んでもらってのお楽しみとして、分野を限らずたくさんの専門家を訪ねて、質問するところが魅力です。その中に一人だけ知り合いがいて、世界的な古地図の専門家の海野一隆氏と言います。

大学1年のときに教養の授業「人文地理学」を受けて、質問をしているうちに知り合いになって、少しだけ研究のお手伝いをしたことがあります。沖縄から九州に向かって、例えば旧石器時代や縄文時代に小さな船で海を渡ろうとするとします。それで、島伝いに船を進めようとしたときに、水平線の上に島の頂上が見えるのはどの範囲かを計算で求めるのです。三角関数を使って計算をして、地図上に島の頂上を中心とした見える範囲の円を次々と書いて行きました。

佐原さんが海野先生に聞いた内容は、この計算内容そのものではありませんが、古代人が航海するときに使う地図のことです。

かんじんの魏志倭人伝のほうですが、邪馬台国がどこにあるかはおいておくとして、弥生時代から古墳時代に移り変わる時代の状況が見えてくる面白い本です。

3◆『日本経済の故障箇所』脇田成 日本評論社 2024 年

日本経済を分析している経済学者で、現状をもっとも的確につかんでいるのが、この本の著者の脇田さんだと思います。会ったことはありませんが、何冊もの著書を読ませていただいて、研究の参考にしました。

日本経済の不況が長く続く原因は、実力が落ちて来たからではなく、むしろ実力が行かせていないからだということを指摘する経済学者はほとんどいません。そのせいで、脇田さんのように低賃金が不況の原因であると見抜いた数少ない経済学者です。

最近は賃上げを訴える経済学者や解説者は増えてきましたが、「賃金に見合った生産性の向上が必要です」と余計なことを言います。特に日本のサービス業の労働生産性が低いことを前提した議論が主流です。これには、私の連載で賃金が低いと見かけの生産性が低く見える「下村理論」を紹介して批判を加えました。脇田さんは、具体的にサービス業の生産性を推定して、それほど低くないことをこの本で紹介しています。

公定金利を引き上げると、株価が下落すると批判されるのを恐れて、この異常な低金利を批判する人はほとんどいません。2024 年の衆議院総選挙で、インフレ対策に金利引き上げをかけた政党は一つもありませんでした。脇田さんは金利が低いことが円安を招きインフレを促進している。それが実質賃金の低下を招いて、景気の足を引っ張っていると経済統計を使って明確に述べておられます。

そんなに完璧なら私の連載は不要だということになります。まちがったことはほとんど書かれていませんが、私が論じたことの多くは話題にされていません。時代に流された経済論調に疑問を感じる人には必読の著書です。

●山口 直樹

1◆上丸洋一『原発とメディア—新聞ジャーナリズム二度目の敗北』(朝日新聞出版、2012)

本書は、朝日新聞記者である上丸洋一氏が、メディア(主要には朝日新聞)が、原発をどう報道し、どう論じてきたかを歴史的に検証しようとした書であるといっている。

本書の序章は、「元科学部長の悔恨」と題して朝日新聞元科学部長だった高津真也氏のことを取り上げている。

それによれば、高津真也氏は、1921 年、東京都牛込久井町に生まれた。

関東大震災が起きた直後の 1923 年に音楽家の父、敏の転任に伴い中国東北部(旧満州)に移住した。父は楽団の指揮者だった。

大連二中を卒業後、1940 年、新設の旧制旅順高等学校に入学した。同校在学中朝日新聞社発行の『航空朝日』が、「戦時下における日本の科学」というテーマで論文を募集。高津は「戦時下の化学」と題する論文を書いて応募し、第二席に入ったという。

その後、1942 年に大阪帝国大学工学部航空学科に進学。航空工学は当時、日本の科学技術の最先端に位置していた。アジア太平洋戦争さなかの 1944 年、高津氏は、西宮市の海軍軍需第二工廠に動員され、

戦闘機の機体材料の研究に従事していた。

敗戦後は、大阪大学工学部に助手として勤務。47 年に大阪工業大学に移り応用力学を担当、1949 年に助教授になった。

その高津氏は、1950 年秋に新聞記者に転じる。この当時でも新聞記者が大学教授になることは珍しくないが、大学助教授が、新聞記者になることは珍しかった。

朝日新聞大阪社会部に配属された高津氏は、阪大や京大で科学ニュースを追うことになった。その過程で物理学者、湯川秀樹と面識を得、信頼も得ていたという。

1964 年から 2 年間、朝日新聞科学部長を務めた高津氏は 1957 年に「核融合の平和利用」と題する論考を朝日新聞内の研究誌に発表したこともあるという。

その高津氏の 2011 年 3・11 後の言葉が本書には、出ている。

「原子力の安全性の問題をもっと紙面で取り上げるべきでした」

実際、「事故」が起こるまで朝日新聞では、原子力の安全性の問題はほとんど取り上げられては来なかった。

高津氏の言葉は、それについての反省の言葉として読める。

第一章「平和利用」への道」、第二章「英国炉を導入せよ」、第三章「原発容認の内実」

第四章「スリーマイル島原発事故」、第五章「問題の所在」というのが本論の構成であり、ここで朝日新聞が、原発をどのように報道し、論じてきたかが、歴史的に検証されている。

ここでは、その内容を具体的に紹介することは控えるが、二人の当時の朝日新聞記者で国策として原発を推進することを支持していた記者と警鐘を鳴らしていた記者二人、合計四人について言及しておきたい。

まず、その一人は、東京大学教養学部科学史科学哲学分科を卒業し、1955 年に朝日新聞にはいった木村繁氏である。興味深いのは、木村氏が、1979 年 1 月の『土木学会誌』に「反技術思想との戦い」という論考を書いていたことが紹介されていることだ。

著者はここに木村氏の科学観・技術観が凝縮していると指摘する。

すなわち木村氏はこの論考で「純粋な科学に携わる人の方が、なんとなく高尚で油まみれの技術者や工学者は低級な人種のような感覚が、現代日本社会の中にはまだある」と指摘。そして「そのもっとも顕著な例は、原子力の問題だ」とし、以下のように述べたという。

「原子力という複雑きわまりない技術について、理論物理学者は、いわば門外漢といってよい。それなのに、そのような純粋科学者の発言は、新聞やテレビなどに大きく取り上げられ多くの人たちに強い影響を与える。それどころか、作家、詩人、文藝評論家、経済学者といったような文科系の人たちまで、原子力についてけたたましく発言し、(略)自ら額に汗し、自らの手を油だらけに奮闘している原子力の技術者や工学者の意見・見解などはほとんど

取り上げられることはない。」(312 頁)

技術者よ、反原発論に反論せよ、木村氏はそう檄を飛ばしているのだ。

これに対する著者の論評は、「たしかに額に汗し油まみれになって働くことは尊い。だが問題は、何のために何をつくるかだろう。」「技術は一人技術者のものなのか」「原発は安全だ」という木村の信念はどこまで科学的なのか(314 頁)という冷静なものである。

付け加えれば、原子力の技術者や工学者の意見・見解の不足を言うならば、原発の末端労働者の声や見解などもほとんどメディアで紹介されないのも考慮しなければならないように思われる。

この木村氏の科学観・技術観の対極にあるものとして本書で紹介されているのは、1974 年の森恭三氏の以下の科学観・技術観である。

「科学技術の問題はもともと門外漢には口出しの資格がなく、専門家に任せるべきと考えられてきた。しかし、それではすまなくなってきたのだ。」

「原子力発電が急速に推進されようとしている。しかし開発における倫理が明確でない以上、環境安全に対する住民の抵抗は強い。工事者側が前々から『絶対安全』といった非科学的な言葉を安易にはいてきた報いを、現在受けているのだ」『朝日ジャーナル 74 年 7 月 12 日号』（本書 315 頁）

国策として原発を推進することを支持していた朝日新聞記者のもうひとり、大熊由紀子氏である。大熊氏は 1963 年に朝日新聞に入社。東京オリンピックの取材を経て、1965 年に科学部に移った。科学部次長を経て 1984 年に論説委員になった。大熊氏もまた『土木学会誌』に木村氏と似たような持論を展開していたことが紹介されている。（なお、原発の被害にあった人々によりそうとするような本を書いている朝日新聞記者、青木美希氏は、大熊氏に取材をしようとして断られている。）

そして、これに関連して原発に警鐘を鳴らしていた朝日新聞記者というのは、のちに科学史に転じることになる泊次郎氏である。

私が、本書を初めて読んだのは、2014 年ごろのことだったと思う。

北京に滞在していたため入手しなかったが、ままならず、日本に一時帰国した時に読んだ。

本書が、私にとって特別な意味を持つのは、本書の最終章が、「満州国」と原子力—新聞ジャーリズム二度目の敗北」と題されていたからである。このタイトルを見た時、はっとさせられたことを今でも思い出す。（私は、2019 年に書いた「満鉄中央試験所の化学技術者は、満洲の資源をどのように認識していたのか」『人文社会論叢』という論文のなかでこの最終章の指摘を引用している。）

ここで著者は、チチハルに遺棄した毒ガス兵器についての裁判に関して書き始めている。

この裁判に関して 2012 年時点で日本政府の責任はこれまで問われていないとし、では原発が事故を起こした場合の責任はだれがとるのかと問うている。誰も責任を取っていないというのが、事故 14 年後の現実である。

そして、畳みかけるように著者は、「満州国」と原子力」は似ていると指摘する。

著者が、このように考えるきっかけは、2007 年朝日新聞で連載された「新聞と戦争」という企画に著者もかかわっていたからであった。

まず、第一の指摘として「昭和のはじめ「満州国」の広大な大地と資源は、日本の人口過剰と貧困をすくう切り札と考えられた。すべてが灰に帰した戦後、原子力の強大な破壊力を「平和」的に利用すれば限りない恩恵がもたらされると人々は期待した。」

「資源への願望、欲望が人々を「満洲国」へ原子力へと駆り立てた」（438 頁）というものがある。

第二に「満州国」は、「五族協和の王道楽土」と呼ばれて理想化された。しかし「満州国」で指導的立場にいたのは、日本民族であってほかの民族ではなかった。

一方、原子力の「平和利用」も実態以上に理想化された。労働時間は 2、3 時間で済むようになるといわれた。原爆投下したアメリカも「平和利用」を推進した者たちも放射能の危険は矮小化した。（439 頁）

第三に「満州国」を建国した関東軍は、統帥権をたてに独走した。

統帥権は、本来は、天皇の権利だが、日本の軍はそれを固有の権利であるかのように語って政府の統制を排除し暴走した。

一方、原子力開発の推進者は、「科学技術の進歩」を錦の御旗に専門性の砦のなか「ムラ」をつくって結束し暴走した。(439 頁)

おそらく戦前の軍部に匹敵する権力を戦後日本において持っているのは、電力会社であろう。

第四に「満州国」も原子力の「平和利用」もメディアが、後押しした。

どちらもフィクションを実体のようにえがきだした。

「満州国」への移住を呼びかけたのは新聞であった。1939 年 6 月 7 日、東京の神宮競技場で「満蒙開拓青少年義勇軍」の壮行会が開催された。

1942 年 1 月、朝日新聞は、茨城県内原にあった満蒙開拓青少年義勇軍訓練所長に朝日賞を贈った。戦後新聞は、原子力の「平和利用」キャンペーンに力を注いだが、原子力の「平和利用」の危険性については何も語らなかった。「平和利用」というフィクションを押し広げたのはメディアであった。「平和利用」キャンペーンを推進した正力松太郎が、警察官僚をやめて読売新聞を買収するとき金を借りに行ったのは、満鉄初代総裁の後藤新平のところだった。(440 頁)

第五に破滅の時を迎えるまで、「満州国」も原発も引き返すことができなかった。

「満州国」の開拓移民と同様に国策として進められてきた原子力開発では、福島で起きた原発事故のため、大勢の人々が放射能に故郷を追われた。国策が失敗した時、その犠牲になるのはいつも国策に巻き込まれた一般の人々だった。(443 頁)

「豊かさや富を求めて身の丈を超えた夢を追い、夢破れるや責任を放り出して遁走する。こうして同じような行動を日本は繰り返した」とも著者は指摘している。

終章の最後は、「満州国」にあった三つの国歌について言及されている。

最初の国歌は 1932 年に発表された。作曲は山田耕作だった。

二番目の国歌は、1933 年発表された。作曲は、在満州の音楽家、高津敏、園山民平、村岡樂童だったという。三番目の国歌は、「建国」10 周年の 1942 年に発表された。このうち最初と三番目の国歌はほとんどどうたわれることがなかった。旧満州を知る日本人の多くが、記憶するのは「天地内有了新満州」ではじまる二番目の国歌だといわれる。

作曲者の一人である高津敏は陸軍戸山学校軍楽隊でホルネットの名手としてならしていた。

1923 年、関東大震災の直前に家族を伴って満州・大連にわたって満鉄吹奏楽団の指揮者に。完成した国歌をもって首都、新京に赴いて満州国軍楽隊による発表演奏をした国務総理も満足し、大衆にも受け入れられたという。

そしてこの高津敏氏の息子こそ序章で紹介されている朝日新聞元科学部長、高津真也氏なのであった。こうして本書は、終章が序章につながる円環的な構成となっているのだった。

私は、最終章のこの指摘には、目を見開かせられるような気がしたし、また本書の構成は、巧みなものと評されるべきであろう。

なお、私は、2011 年 3 月 11 に「満州国」のハルピンから引き揚げてきた『ゴジラ』(1954)

「主演」俳優、宝田明氏からの電話を北京でうけとるという経験をした。そのため本書には深い因縁

を感じざるを得なかった。出版から 13 年たっているが、状況は全く変わっていないどころかむしろ逆行すらしている。ぜひ多くの人に読んでもらいたいと思う。

2◆星新一『人民は弱し官吏は強し』(新潮文庫, 1978)

著者は、ショートショートで知られる著名 SF 作家である。

本書は、星新一の父、星一の評伝である。

すでに何度も版を重ねており、古典といってよい域に達している本かもしれない。

星一は、福島県生まれの実業家である。

12 年に渡るアメリカの留学生活で苦学しながら自由な発想を実現するバイタリティを身に着けることになった。星の関心は政治や経済とりわけ統計学にあったという。

一方そんな星が、注目したのは植物のなかに含まれているアルカロイドという物質であった。

ここからイヒチオールという物質やモルヒネの製造を考えるようになり、実際に販売していくことになる。後藤新平や同郷の野口英世などとの交流も興味深く描かれている。

とりわけドイツの化学者、フリッツ・ハーバーとの交流も興味深い。

星が、自分が計画中の冷凍工業のことを話すとハーバーが、「それはいい仕事だ。食料関係のみならず、化学の分野でも新しい世界を切り開く武器になるだろう。動物や植物の中にはまだまだ未知の有効成分が含まれているはずだ。(中略)微妙な有効成分となるとそれを破壊することなく抽出することは難しい。熱や薬品ではダメな場合がある。その時、凍結させて乾燥させればきつとうまくいくに違いない。」

ハーバーは好意あふれる言葉を残して満鉄からシベリア経由で帰国したという。

その途中でハーバーは、星に滞在中のお礼として手紙を送っている。

そのなかには「日本も満洲に手を伸ばしてお金をつぎ込むよりももっと奉仕的な星の事業を国家が応援すべきだと思う」と書かれていたという。(153 頁)しかしこの話は、後藤新平にはしなかったと書いてある。当然だろう。後藤がこの話を聞いたら顔をしかめるだろうとことはまちがいない。

星の考えていた冷凍工業だが、こちらは加藤高明内閣や官僚たちによって陰湿な妨害に会い、裁判の結果、星の努力は水の泡となってしまう。

それで本書の最後で星が、かすれた声でいいそえるのが、「人民は弱し官吏は強し」という言葉である。官吏の世界を独占しているのは、薩摩藩や長州藩の人々であり、会津藩出身の星は、人民の側の実業家である。今日においても「人民は弱し官吏は強し」という状況は、それほど変わってはいない。

おそらく星一は、科学者ではないが、市民科学の系譜に属する人であろう。

星一が創設した大学は、今日でも星薬科大学として残っている。

私が因縁を感じたのは、北京で出会った田中保成氏から『南京レクイエム』という本の解説を頼まれて書いている過程で衛生材料薬学者の山口誠太郎に会うことになったときである。山口誠太郎氏は、1939 年に南京を訪問したとき紫金山の麓に咲く「紫の菜の花」の種を取り、日本に持ち帰り、「紫金草」と名付け、広めていったことがわかってきた。1985 年のつくば万博では 100 万袋の紫金草の種が配布されたという。紫金草は東京でも咲いているところを見ることができるが、山口誠太郎氏は、星薬科大学の教授だった人であり、星薬科大学の校花は、紫金草なのである。

解説は、後藤新平の娘の息子である鶴見俊輔氏が書いている。

鶴見俊輔氏は、5 歳の時、後藤新平を訪問してくる星一氏の姿を覚えていると書いている。

3◆三浦綾子『石ころのうた』(角川文庫, 2023)

私は、ある事情から「住井すゑと三浦綾子―戦時下の記憶にどう向き合うか」という文章を書くことになった。

両者は、世間的にはどちらも「反骨の作家」というイメージがあるのだが、住井氏は、戦時期には翼賛的な文章を数多く発表している作家であった。

たとえば 1944 年に『台湾公論』(1944 年, 7 月号)に住井すゑ子名で「農婦われ」という作品を発表している。そのなかで住井氏は以下のように述べていた。

「戦争は神の賜物であるをつくづく思う。思想運動的な方法では、百年をつくしても不可能であろう改革が、是正が、戦争による時は一年、いや半年、時には数日によって可能になるのであるから。農民の自治的な社会機構を理想として、二十数年ペンの闘いを続けてきた私は、今、むしろ苦笑をもって現実を眺めそして過去を振り返るものである。」

そしてこの後、次のように続ける。

「戦争はありがたい。戦争は価値の標準を正しくしてくれる。そして、人間の心に等しく豊かさを与えてくれる。戦争による物質の欠乏故に、もしその生活が貧しくなったと思う人があるなら、それは本質的に貧しい人で、これは神とて救う道はあるまい。生活物資の欠乏とともに、心は益々豊かになってゆく。これが人間本来の姿でなければならない。」

ほかにもこうした文章を書いた作家は少なくない。しかし最大の問題は、戦後の住井氏が、あたかもこれらをなかったかのようにし、実際とは違う住井すゑ像を流布し続けたことにある。

これとは対極的な作家として三浦綾子がいると思われる。

三浦綾子の自伝『石ころのうた』(角川文庫, 2023)は、専がなくても問題なく読み進めることができる。

1922 年北海道旭川生まれの三浦綾子は、『氷点』で作家デビューして以降、数多くの作品を世に問うている。『石ころのうた』(角川文庫, 2023)は、高等女学校を卒業して、歌志内町・旭川市で7年間小学校教員を務め退職し、病を得るまでを描いた自伝である。

私はかなり引き付けられるものがあった。

昭和 11 年秋、北海道において陸軍大演習が行われることになり、彼女の通っていた女学校に天皇の勅使が来るということが知らされ、学校で勅使を迎える練習をするというエピソードが前半に出てくる。(23 頁)

これにともない学校から二百メートル離れていたという牛朱別川に机や窓を運び、ゴシゴシ洗う作業を幾日もさせられたのだという。真夏にじりじりと照り付ける太陽のもとで「頭、右」という号令の下に一斉に頭右をする。そろわないと何回もやりなおしをさせられたと書いている。時局講演会が、開催され、「天皇機関説」の美濃部達吉を罵倒する講演が行われたり、「国体の本義」という本が、国民教育の本として幅広く読まれていた。

天皇が著しく神格化され、その天皇に生命をささげ奉ることを光栄とする教育が、なされはじめるが、彼女たちはそれを何の抵抗もなく受け入れたと述べている。(52 頁)

そのような教育をうけた三浦綾子は、小学校の教師となって 1939 年から働き始める。

教育熱心で情熱的で一途な教師だった。ただし教育の目的を問われると「それは立派な天皇の赤子を育てるためです」というような「熱心な」教師なのであった。

最初につとめた歌志内町の神威小学校は必ずしも平穏な学校ではなかった。

というのも毎朝全校生徒約 2000 人が出席して行われる朝礼では、毎回、「皇居に対し遥拝いたしますしよう」といい「最敬礼」の号令で敬礼し、「直れ」の号令で頭をあげる。

一方、動きを乱すものには、容赦なく体罰が加えられていたらしい。

全員が、一斉に折り目正しく動くことに当時の三浦綾子は感じ入っていたという。

当時の神威小学校の教育は、軍国教育の最先端をいていたわけである。

あるとき三浦綾子は、炭鉱の長屋に住んでいる N という男子と知り合いになる。

16, 7 歳の N は、複雑な家庭環境で母親は、継母であった。

そんな N は、「戦争って結局は人を殺すことでしょう。別に憎くもなんともない、見たこともない相手を殺すわけでしょう。それなら憎いおふくろは殺してもいいような気がするんだけど」と語ったという。結局 17 歳で人間について何も知らない三浦綾子は、N には何ともいえないままだった。N はなにも言わないまま去っていくことになった。

その N の住んでいた同じ長屋の住人で E という青年がでてくる。

三浦綾子は、その長屋の人から「実はこの長屋には、危険思想の持ち主がいるんです」と告げられる。実は E がその「危険思想」の持主なのであった。

三浦綾子が、住んでいた寮の庭で朝鮮の婦人が、タンポポをつんでいる場面が出てくる。

ここにいわせた E が、「あの人たちにタンポポぐらい自由につまませてやってください。日本はあの人たちからふるさとを奪い、そのふるさとをどれほど踏みにじっているかわからないわけですからね。」と告げる。

また E は、「満洲」にいて少年義勇軍にはいるという N に対して

「満洲にいて何がある。満州国は砂上の楼閣に過ぎない」とも語ったという。

「危険思想」の E のこの予想は当たった。

E は、「今の日本ではわからないものが、わかったような顔をして生きている。下手にわかれば刑務所いきですがね」と語り、三浦綾子から去っていった。

1940 年神威小学校では、皇紀 2600 年の学芸会が行われたが、その担当教師は、三浦綾子だった。

その後、三浦綾子は教え子たちとのつらい別れを経て、神威小学校から旭川市の啓明小学校に 1942 年から務めることになった。

啓明小学校は、神威小学校とは違っていた。まず朝礼では、神威小学校のようにブザーが鳴って一斉に生徒たちが校庭に集まるというようなことはなかった。

当時の三浦綾子はなにかだらしなく感じがすると批判する文章を校長に送っていた。

その横沢校長は、三浦綾子に以下のように告げた。

「あれはね、芦田校長がはじめたことですよ。芦田さんはね、人間は号令で動かせるものではないと固く信じている人ですよ。人間が人間を動かすというその姿勢が嫌いなんです。同時に号令で威嚇されて、動く人間になってもいけない。自主的に動くのが人間でなければいけない。というわけでブザーも

鳴らさない。」

この教育は、自由主義教育であり軍国主義教育の抵抗でもあった。しかし、当時の三浦綾子は、「体育の時間だって号令をかけているではありませんか」といってつまらぬものだったという。

1944 年からアメリカ軍の空襲が、日本でも始まり、三浦綾子のいた旭川でもアメリカ軍の飛行機が爆撃を開始するようになっていく。

そしてついに 1945 年 8 月 15 日を迎える。

15 日の朝、食事をしている三浦綾子の耳に「今日、正午に玉音放送があります」という声が入った。そのとき三浦綾子はもっていた箸をおき、「天皇陛下のお声が聞ける！」と喜び、「昨日死んだ人はかわいそうに。天皇のお声を聞けなくて」といったことを今でも覚えていると書いている。(327 頁)

三浦綾子は、玉音放送を学校で聞きたいと思い、出勤すると校長をはじめ同僚たちも集まっており、「一億団結して戦え」というお言葉が発せられるのではないかと語り合っていたという。雑音がひどくてよく聞き取れなかったが、アナウンサーの「国体は護持されました。」という言葉は聞き取れたが、横にいた横沢校長が、「戦争は終わりました。日本は負けました」と語った。三浦綾子は、ほかの教師たちと屋内運動場にある御真影のある奉安殿のまえにいてひれ伏して泣いた。

「自分たちの力足らずで戦争に負けた。それを陛下におわびするという真情だった」と三浦綾子は述べている。(329 頁)これは堀田善衛の『方丈記私記』で東京大空襲があった翌日、深川にあらわれた昭和天皇に「陛下、こんなにしまい申し訳ありませんでした」と額を地面にこすりつけて詫げる民衆の姿となんと似ていることだろうか。

泣くだけ泣くと三浦綾子の胸には空虚さが押し寄せてきたという。

神風は吹きはしなかったではないか、神国日本に必ず神風は吹くといっていたのはどうしたのかという思いが押し寄せてきたのである。

三浦綾子の胸中にあったのは、指示のままに、従順に教科書に墨を塗っていた生徒たちの姿だった。教科書は神聖なものだから大事に扱いなさい、そう教えていたのに、今度はその教科書に墨を塗らせている自分とはなにか、そういった自責の念に駆られていたのだろう。そのあとに続けて三浦綾子はこう書いている。

「(乞食になりたい)

「わたしは本気でそう思い、路傍にすわって、人に物を乞うている自分を想像した。

真実を教えるべき教師が誤ったことを教えた罰は、乞食こそもっともふさわしい。

なまじ教師であったからこそ、その言葉を生徒は信用したのだ。乞食の言葉なら信じはしまい。この世のなんの発言権もない乞食の姿が、わたくしには清しくもまた賢く思われた。乞食ほど、この世に害毒を流さぬ存在はないような気がした。政治や教育家のほうが人を害する。が、乞食はただすわって、恵んでくれる金をありがたくもらっているだけなのだ。乞食に金をくれたために、生活に困ったという話も聞かない。利益のためには不正も意に介しない商人などと較べたら、乞食は何と人の害にならない存在だろう。

第一、誰一人尊敬してくれるはずのない、存在というのは、これはもう、それだけで立

派ではないか。人に尊敬されたいというみみっちさがないだけでも、聖人君子などより立派ではないか。」(343 頁)

三浦綾子は、教えることの怖さ、恐ろしさをよく知っている作家である。

1946 年、「教育に情熱を失ったら即座に教壇を去る」常日頃からそう言っていた三浦綾子は、教壇を去り、その後、二度と教壇に立つことはなかった。それが三浦綾子なりの教え子への責任の取り方だったのだろう。

そして、この言葉は至言というべきではないか。心に響く言葉である。「政治や教育家のほう人が人を害する。」というのは真実であろう。

この言葉は、同じ綾子でも『運命の足音』で「部落差別などもうないのに余計なことを言ってくる人たちがいる」と書いた差別的作家、曾野綾子とも、そして同じ三浦といっても統一教会に家庭を破壊された山上徹也氏の事例を「競馬で大金をすったようなものです」とテレビで放言した三浦瑠璃のバカバカしい軽薄さとも大きく異なっている。

自伝というどうしても自己を大きく見せようとしたり、自己を美化したりしてしまうものだが、三浦綾子という作家にはそれが非常に希薄である。

そして自分が「皇国のために死ぬる立派な皇国民」を養成する小学校教師だったことを隠してはいない。

「誰が何のために起こした戦争か国民は知らなかった。もっとも重要なことはいつの時代にも庶民には秘められ、知らされなかった。庶民はいつもひとにぎりの資本家のために戦争に巻き込まれ、夫を子供を戦場に送り、つらい思いをして生きてきたのである。」(297 頁)と書く三浦綾子は、むしろそれを前面に押し出し、自己を解剖することによって「戦争とは何か」「人間とは何か」という思考に読者を導くのである。

たとえば三浦綾子は、「昭和 7 年の上海事件以来、わたしたちは兵士への慰問文を書くことにならされていた。が、日本の国が戦争をしているという実感がなかった。

むしろ昭和 11 年の 2・26 事件で大臣たちが、暗殺された事件のほうになまなましかった。この 2.26 事件が翌年の日支事変大臣たちが暗殺されたほうが、なまなましかった。

この 2・26 事件が翌年の日支事変とどのようなかわりをもつかをしるには、私たちは社会的に幼すぎた。世界を震撼させた南京の大虐殺さえ、終戦までほとんどの日本人の知らぬところであり、戦争は誠に遠いところで起こっている事件に過ぎなかった。」(51 頁)

と書いているが、これは辺見庸『1★9★3★7』の中の記述と非常に近いものがある。

私は、三浦綾子は、辺見庸、堀田善衛、武田泰淳など日本では数少ない「自己解剖の作家」とでもいう系譜に入る作家だと感じる。残念ながら住井すゑ氏はこの系譜に含めることはできない。住井氏に最も欠けているのが、この自己解剖をする姿勢だからである。

ロシアのウクライナへ侵攻する戦争やイスラエルのパレスチナへの侵攻する戦争が続く中で「戦争はありがたい」という作家が再び日本に現れないという保証はどこにもない。

最後に三浦綾子が、『石ころのうた』の最後に書いている言葉を記す。

「このともがら黙さば石叫ぶべし」(ルカ伝 19 章四十節)

弟子の口を封じようとした人々に、キリストの答えた言葉である。

故にわたしは、この書を記した。叫ぶほどでなくても、どんなつまらない石ころもまた歌うものであることを知ってほしいが故に。そしてすべての石ころを押しつぶすブルドーザーのような権力の非情さ

を知ってほしいが故に。」(358 頁)『石ころのうた』(角川文庫, 2023)

●野山宗一郎

I ◆NHK 映像の世紀バタフライエフェクト「地球破壊 人類百年の罪と罰」初回放送 2023.11.6

<https://www.nhk.jp/p/butterfly/ts/9N8IM92LXV/episode/te/BRVVVRXJ37/>

このテレビ番組は、産業革命が進み、夏目漱石をも嘆かせたロンドンの「黒い霧」に始まり、臨界点を越えようとしている気候危機の現在までの百年の地球破壊の記録である。自動車排ガスによるスモッグに苦しむロサンゼルス。高度経済成長期の日本で起きた公害。海洋汚染。そして地球温暖化による気候変動。人類の際限のない欲望が地球を破壊している。自然からの警告に、人類はなぜ目を背けてきたのか。豊かさとは何か？ 以下はそれに関わる 2 冊である。

◆「センス・オブ・ワンダー」レイチェル・カーソン著 上遠恵子訳 1996 年 新潮文庫)

東京新聞 2025.1.25 の「今日の名言」、『「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要でない』は、「沈黙の春」で DDT の有毒性を告発した著者の小著の一文である。「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」が事実をうのみにさせるよりも大切という。

◆「ヒルビリー・エレジー」J.D.ヴァンス著 関根光宏・山田文 訳 (2017 年 光文社)

2025 年 1 月、第 2 期トランプ政権の副大統領に就任した著者が、ラストベルトの人々(薬物依存者なども)の生態を描いた書である。渡辺由佳里氏の解説(2017 年 2 月)は、アメリカの繁栄から取り残された白人、将来に悲観的なヒルビリー(田舎者)は、高等教育を得たエリートたちに敵意と猜疑心を持っている。そんなヒルビリーたちに声とプライドを与えたのがトランプなのだ。しかし、トランプ関税は製品価格に影響し、打撃を受けるのは無職や低所得の国民である。50 年後のアメリカ人が 2016 年のアメリカを振り返るとき、本書は必ず参考文献として残っていることだろう、と記している。第 2 期トランプ政権で投与され始めた劇薬(パリ協定離脱など)の効果は 4 年後の 2029 年時点でどうだろうか。この政権を支えるマスク氏や献金する GAFA などを見ると、「テクノ封建制 デジタル空間の領主たちが私たち農奴を支配する とんでもなく醜くて、不公平な経済の話」(ヤニス・バルファキス著、関美和 訳 2025 年)を読みたくなる。

2 ◆「杉並は止まらない」岸本聡子著(地平社)2024 年 11 月

著者は 2022 年の杉並区長選で当選した杉並区初の女性区長である。「コモンの「自治」論」(斉藤幸平+松本卓也編(集英社)2023 年 8 月)の第 3 章に著者は「<コモン>と<ケア>の両輪」、「<コモン>の再生を目指す運動が資本主義が抑圧する<ケア>の分野とそこで働く人々を守ることになる」、「「コモンとケア」の結節点に地方自治の原点がある」という。本書はその考え方にもとづいた、就任から 2 年の杉並区政変革の実践記録といえる。「対話の区政」による草の根民主主義・住民自治の実践、新自由主義や市場原理主義に対抗する公共サービス重視(「職員はコストでなく財産」)、2023 年区議会議員選挙で多くの女性新人議員誕生。「性の多様性を尊重する条例」など「当たり前の人権・多様性」の実

現など、地方自治改革の試みの参考書といえる。

3◆「介護ヘルパーごたごた日記」佐東しお著（発行：三五館シンシャ 発売：フォレスト出版）

人生の終末期を支える介護保険制度が財政危機と介護人材不足により破綻の危機にある。特にホームヘルパー（訪問介護）は3K 職場。担い手不足解消には待遇改善と報酬引き上げしかないが、政策はむしろ逆。年金暮らしの独居高齢者は人としての尊厳を維持するのが困難。鼻が曲がるようなお宅も。そのようなケア職場の実態が綴られた秀作である。著者は、障害児・親・他人のケアを行ってきいて、「この仕事の嫌なところを百も千も言えるのに、それでもこの格好で胸を張って歩いている。私は、ヘルパーである私が好きだ。」と語る。夕日の中で「燦然と光り輝い」ているようで、「令和の糞尿譚」といえる。

なお、この20冊を超える「「職業」と「人生」を読むドキュメント日記シリーズ」には、「ヨレヨレ」「ヘトヘト」などのタイトルが示すように、「職業に貴賤はない」とか「エッセンシャルワーカー」などの建前と違って、喜怒哀楽の人間模様が語られている。

「メガバンク銀行員ぐだぐだ日記」（目黒冬弥七著）には、お金を扱う銀行員のバブル崩壊後の過酷な職場の記録である。過酷なノルマの営業、封建的上下関係の組織、出世競争、カスハラ客や特殊詐欺のカモ客対応など。制服の下は生身の人間。なお、貸金庫の話は未だない。

DIAMOND online の「現役メガバンク行員が語る「銀行員のトホホな生態」」は同じ著者の類書である。<https://diamond.jp/category/s-megabankkouin>

●上田 昌文

今回は「3 作品」を選ぶにあたって、2024 年という年にひっかけてみた。取り上げた2冊の書物は2024年に刊行されたもの。そしてフォーレの音楽は、2024 年が作曲者没後100年にあたる。

1◆宿屋昌則『人・建築・地球とエクセルギー』（建築資料研究社、2024 年）

2024 年に市民科学研究室の各研究会（「低線量被曝」「環境電磁界」「熱と暮らし」「食の総合科学」「生命操作」「アーカイブ」）では、毎月1回の定例会合で「読書会」の時間を設け、それぞれで選定した書籍をメンバーで共通に読むテキストにしてきた。本書は今後「熱と暮らし研究会」で取り上げてみたい1冊である。

ただし、比較的最近、著者から刊行を知らせていただいて読み始めたのだが（※）、簡単に読み飛ばしてはならない—自分で計算してチェックすべきところはそうしながら理解していくことが必要な—内容なので、まだ読み終えてはいない。でもエネルギーと環境の物理的理解に関心のある方は、誰もが最初に手にとってみるべき書物であることは、確信をもって言える。扱っている現象の多様な広がり、それらに関連付けて統合的に把握していくための、熱力学を軸に据えた科学的アプローチの有効性を、煩わ

しい数式を羅列することを一切せずに、納得できるように示した、大変貴重な本である。「室内側と室外側とに設けた日除けの効果の違いはなぜ生じるのか」「38 度のお風呂に入るとぬるく感じるのに、気温が 38 度の炎天下ではたまらなく熱く感じるのはなぜか」「真夏には道路や壁面が 40 度を越えることがあるが、植物の葉はそうならないのはなぜか」……こうしたことの的確な理解が、市民が持つべき科学知としていかに重要であるかが、この本を読めばはっきりとわかる。

※もう 20 年近くも前に、本書の著者の宿屋氏に行ったインタビューが市民科学研究室のウェブサイトに掲載されている。
インタビューシリーズ「市民の科学をひらく」(7) 宿谷昌則さん

https://www.shiminkogaku.org/wp/wp-content/uploads/interview_003_shukuya.pdf

なお、本書の主題である「エクセルギー」を自身でいくらか定量的に扱えるようになるためには、次の書物が役に立つかもしれない。後者では、本の後ろ半分で内燃機関、蒸気原動機、ヒートポンプを題材にしている。

・『**エクセルギー エネルギーの新しいものさし**』(アベイラブルエネルギー研究会・編著、藤森礼一郎・構成、電気新聞ブックス 2010 年)

・『**熱力学 事例でわかる考え方と使い方**』(君島真仁ほか・著、実教出版 2011 年)

また、古い本だが、住宅における熱利用の問題を具体的な事例(実験データも折り込みながら)から再考を促している次の 2 つも参考になる。

・『**天井冷暖房のすすめ**』(葉山成三・著、ちくまライブラリー44、1990 年)

・『**省エネルギー住宅の考え方**』(真鍋恒博・著、相模書房 1979 年)

2◆橋本直子『なぜ難民を受け入れるか—人道と国益の交差点』(岩波新書 2024 年)

世界は今、自国優先主義を掲げて我が物顔にふるまう大国の横暴にひっかき回されている。それに引きづられるかのように、ナショナリズムに傾斜し、移民・難民の受け入れを問題視し、なかにはその排斥を公然と口にする政治家たちも各国に現れている。

21 世紀になっても世界のいたるところで政治迫害や人権侵害がいつこうに収まらないなかで、そこから逃れ出ようと国境を越える人たちを、かろうじて守る術として機能しているのが、難民保護の国際的な理念であり、条約であり、(国によって様々な形をとる)その認定と受け入れの方式だ。難民保護は、言うならば私たちが、国益を見据えつつも人道主義にどこまで本気に取り組めるか(そのことをとおして「真の国益」と何なのかを自覚的に探っていくか)、そのことの試金石となる事柄だ。

この事柄の全体像を知ることが 1 冊の新書でできるように書かれている、と感じさせるのが、この本のすごいところで、私はこれほど密度の高い、理路整然とした記述で書かれた新書を久しぶりに読んだ気がする。

本書は、難民の定義から始まって、欧米各国の難民を受け入れてきた歴史とその論理、それを受けて日本の現状の分析、さらに排外主義の根拠とされがちな「犯罪」「財政負担」の問題の乗り越え方についての提言、と続く。日本はこれまで難民への財政的援助にはそれなりに力を入れてきたが、難民の受け入れには消極的だったと言わざるを得ない。各国での難民認定と受け入れの歴史的経緯と現状をつぶさにみていくなかで、著者は、日本には、他国に入国した難民を自国に連れてくる第三国定住方式をもっ

と有効に活かす道があることを指摘している。このことが本書の要点の一つと言える。

データを示しながら人道主義と国益との賢明なバランスの取り方を具体的に示せるのは、まさに著者が国際機関の職員として各国政府と対峙してきた実務経験と学術的な蓄積が兼ね備わっているからだろう。論旨は明快だが、記述は重厚であり、簡単には読み飛ばせない。幸い著者のインタビュー記事とネットでの連載記事が公開されているので、それらを読んでからこの新書に取りかかるのもいいのではないかと思う。

難民と日本社会を考える（全2回）

<https://www.intelligence-nippon.jp/2024/10/24/1809/>

<https://www.intelligence-nippon.jp/2024/11/14/1859/>

世界と日本の難民・移民問題（注：現時点で11回の連載）

<https://forbesjapan.com/author/detail/1695>

3●ガブリエル・フォーレのヴァイオリン・ソナタ第2番

私は、幾人かの偉大な作曲家の“全作品”を、長い時間をかけながら聴くことが、私にとってのクラシック音楽の最も実り多い楽しみ方だと思っている。それは単に「(CDの音に)耳を傾ける」だけにとどまらない。伝記や評伝を読み、そこに出てくる楽曲や譜例を音でたどり直し、原語のテキスト（歌曲の歌詞や歌劇の台詞など）を読み、時には楽譜をピアノの鍵盤でたどたどしくさらってみる、必要があれば研究書や論文も覗いてみる—いわゆるクラシック音楽ファンのなかで、こうしたことまで手掛ける人がどれくらいいるのかはわからないけれど、自分を魅了する音楽の真髄、それを生んだ作曲者の創作の秘密に、“自分なりに”一步一步迫れることが何より楽しいのだ。

「全作品踏破」をしてきた作曲家のなかで、もっとも長くつきあってきたのが、フランスのガブリエル・フォーレ（Gabriel Urbain Fauré, 1845年-1924年）だ。全作品を聴いたからといって、その創作者がどんな人柄の人物であるかはわかるものではないが、その生涯をつぶさにたどることで、私には、フォーレほど高潔な人間性を持った音楽家はいないのではないかと思うようになった。だから、ピアニストの堀江真理子さんが述べている次の言葉に、私は心から賛同するのだ。

「フォーレの音楽の特質はその品の高さである。彼は持って生まれた上品さに加え、穏やかな性質、しかし不正に対しては断じて戦う正義感、そして謙虚な心、必要なことだけを正確に伝える意思、欲のない生活、この姿勢を七九年間貫いたのだった。そしてそれがそのまま音楽に投影された稀有の作曲家である。己の精神性を高めなければ決してフォーレの世界に近付くことはできない。素直に無心になった時、フォーレは私達を迎え入れてくれるかもしれない。」（『フォーレ頌 不滅の香り』日本フォーレ協会・編 1995年所収、139頁）

ここではフォーレの音楽がいかに奥深く比類のない高みに達しているかを詳しく述べるわけにはいかないので、これまでの「つきあい」の経緯を極簡単に振り返ってみる。そして「おすすめ」としては、西洋音楽の一つの頂点とも言える晩年の作品群の嚆矢であり、私のとってもその音楽の比べるもののない素晴らしさの発見の入口となった「ヴァイオリン・ソナタ第2番」を挙げることにする。

出会いは、ドビュッシーとラヴェルに夢中になっていた中学生時代に「フランスピアノ名曲集」とい

ったタイトルのレコードで聴いた「[即興曲第 3 番](#)」だった。その透明で軽やかで、しかし何か心の深いところに触れてくるような、不思議な魅力を感じた。でもその時はそれきりで、生涯にわたって作られたピアノ曲の「夜想曲」(全 13 曲)や「舟歌」(全 13 曲)に目を向けたわけではなかった(最もよく演奏される中期の傑作「[夜想曲第 6 番](#)」に馴染んだのも二十歳前後だったと思う)。転機は当時土曜日の朝 7 時台に放送されていた NHKFM「大作曲家の時間」でフォーレを取り上げていたこと(確か 10 回くらいのシリーズ)。カセットテープに録音して一渡り聴いたなかで、よくわからないが何か非常に魅力的な部分が点在することを感じ、どうも「優美な旋律と心地よい和声のサロンの音楽」で収まらない作曲家であるらしいことが心に刻まれた。

決定的だったのは、コロンビアレコードから出ていた『フォーレ歌曲全集』(アメリック(S)+スゼー(Br)+ボールドウィン(p))を貯金をはたいて買って聴いたこと(高校 3 年生の時、すでにシューベルトの歌曲を通じて、ソプラノ歌手のエリー・アメリックのファンでした)。[作品 1-1 の「花と蝶」](#)(1861 年、フォーレ 16 歳の時の作品!)から始まって、中期の『[優しき歌](#)』(1893 年)や後期の『[イヴの歌](#)』(1910 年)『[閉ざされた庭](#)』(1914 年)といった歌曲集を経て、最晩年の作品『[幻想の水平線](#)』(1921 年)まで、珠玉のような歌の数々(全部で 100 曲ほどある)を立派なブックレットの対訳をたどりながら繰り返し聴いた。

日本語訳ではなんともしっくりこない感じがよいよたかまってきて、フランス語を自学自習することを決意し、NHK の通年のラジオ講座を聞き通したのもその頃だ。フォーレの音楽の大きな柱の一つである歌曲の世界から入った私だったが、これほどに親しんでもなお、晩年のいくつかの室内楽やピアノ曲に対しては、全体が掴み難い、もやもやした感じを覚えていた。そんな時期に吉田秀和の『私の好きな曲』のなかに収められた「フォーレ『[ピアノと弦のための五重奏曲第 2 番](#)』」を読んで、「そうだ、じっくりと丁寧に作曲年代順に聞き込みながら、その音楽の構成・展開を少しずつ解きほぐしていく、というやり方が求められる音楽なのかもしれない」と改めて気付かされた。と同時に、その解きほぐしには、曲の分析に欠かせない和声学の知識も必要だと痛感し、これまた無謀にも自学自習で和声学の教科書などを読んで勉強することにした(今ではネットに「[SoundQuest](#)」のような素晴らしい無料の学習サイトがあるけれど.....)。精妙極まりないフォーレの和声の使い方の秘密の一端に触れてみたいからだ。

日本フォーレ協会が、フォーレの唯一の歌劇でめったに上演されることのない『[ペネロープ](#)』を室内形式で初演したのを会場で聴いたことも(1995 年)、「まだ自分にはとらえきれない何か」に目を向けさせてくれた点でありがたかった。今では私は、この歌劇は今後きっとその独特の美点が再認識されて、上演の機会が増えてくるのではないかと考えるようになっている。

最初はとっつきにくいと感じさせられるものの、聴き込んでゆくにつれて、自分のなかに深く入り込んでくる何かが感じられるようになる。それが手がかりになって、これまでとらえられなかったものが、一気に全体をとらえられるようになる。そして、この上なく純粋で気高い精神の高揚に導かれることになる—そのような体験ができる音楽はそうざらにあるものではない。ヴァイオリン・ソナタ第 2 番でそれを体験してもらえるといいのだが。

幸いこの作品を日本人演奏家による非常にすぐれた演奏で聴くことができる。

『ポエム～ショーソン:詩曲(イザイ編)、フランク:ヴァイオリン・ソナタ、フォーレ:ヴァイオリン・ソナタ第2番』

千々岩英一（ヴァイオリン）、上田晴子（ピアノ）

<https://ml.naxos.jp/album/OVCL-00612>